

ずいそう

私の中国

井上 哲夫



①広東省珠海への赴任

私は、2008年北京五輪の熱狂の中で中国広東省珠海市に赴任した。

直後にリーマンショックとなり慌ただしいスタートとなったが、幸い赴任先の自動車部品FB（ファインブランキング）事業は中国自動車産業の急回復によって少しずつ軌道に乗って行った。

珠海は中国南部の珠江の河口で、香港の対岸、マカオ（澳門）の隣町の風光明媚な観光都市である。特にマカオはポルトガルの租借地で、500年以上東洋と西洋の文化の交流点として特別な歴史を持ち、日本との関係も深い土地である。

また、広東省は中国の明治維新とも言われる辛亥革命の始まりの地域であり、近代中国にとっても重要な舞台となっている。



写真—1 総経理室

海外駐在員にとって大きな課題である現地での食生活は、恵まれた環境であった。

中華料理は「北京料理」「上海料理」「湖南料理」「四川料理」等の地方食があり、そのメニューは豊富で中国人が一生かけても全部を制覇するのは不可能な数であると言われている。その中でも「食在広州」と言われるように「広東料理」は豊富な食材で、我々日本人にとっても親しみやすい料理である。

加えて、陸路で繋がる隣都市「マカオ」はポルトガル料理をはじめ多様な西洋料理を食することが出来る食の宝庫であった。

②仲間との出会い

中国では多くの人と出会い、大変お世話になった。

まず、私を支えてくれた現地パートナーのお話をしたい。彼は上海生まれで、日本の大学に留学経験もある大の日本通であった。文化大革命の時には農村生活で大変な苦勞をしたと話してくれた。

当社も建設に携わった宝山製鉄所の中国側通訳として昭和40年代に来日した際に、ジャーナリストであった彼の祖父との再会は、まさに「大地の子」を思い起こさせるエピソードであった。赴任直後に珠江の夕日を見ながら、互いの家族や人生について語り合ったことは、中国生活の中でも一番の思い出である。

工場とともに働いた仲間達も忘れられない存在である。

毎年春節前に行われる従業員全員参加の忘年会で、キラキラと希望に満ちた目を輝やかせながら大合唱し



写真—2 モンテコタイよりマカオ市街



写真—3 MTF 全員写真



写真—4 孫文と滔天の筆談



写真—5 桂林の絶景

た「明天会更好」（明日はもっと良い日になる）は、今でもはっきりと記憶に残っている。

今日の中国経済の大躍進を予感させる感動のシーンであった。

③歴史探訪

初めての海外赴任で日本語に飢えていたのか、それまでも大好きだった歴史小説に加えて、中国では陳舜臣氏の中国維新前夜の小説を多数読むことになった。

孫文生誕地に近いところでの生活も動機の一つかもしれない。

日本帰国に合わせてアマゾンで購入したランクー杯に詰め込み、航空追加料金を支払うことになったこともあった。

陳舜臣氏の作品は、「中国5千年」の歴史から現代に至るまで幅広いジャンルがある。

その中でも、特に熱中したのは中国近代史を舞台とした「阿片戦争」「太平天国」「孫文」「江は流れず」「山河在り」等々である。実際に広州の国民政府・黄浦軍事学校跡を見学した時は、当時の息づかいに触れることが出来た。

中国は悠久の歴代王朝と辛亥革命から現在の中華人民共和国の建国に至るまで動乱の歴史があり、日本に与えた影響とともに興味は尽きない。

④日中友好

最後に、日本と中国の関係についてお話ししたい。

我社の九州事業所がある福岡県大牟田市の隣街に熊本県荒尾市がある。

そこには、近代中国の父と尊敬される孫文と固い友情で結ばれた宮崎滔天兄弟の生家が残されている。

筆談によって、互いの思いを確認し深い信頼関係を築いたと解説されている。

辛亥革命の支援を受けた孫文は、国民政府の臨時大統領就任直後に、お礼のため2度目の宮崎家への訪問をしている。三池炭鉱の視察も行なった孫文は、数多くの足跡を残している。歴史ファンの皆さんには是非とも機会あれば訪ねて頂きたい。

当社50周年記念式典の際に、先にお話した中国パートナーと一緒に荒尾の宮崎兄弟の生家を訪問した。彼もまた展示物を非常に熱心に見ていたのが印象に残っている。

今回中国珠海という東西文化の融合点に住み、色々な国の人達の共存共栄が可能なことを実際に体験することが出来た。それを可能にするのは、常に民間人の交流であると確信した。そうした意味で、今日の訪日外国人3000万人の時代はこれからの未来を切り開く明るい材料として歓迎したい。

私にとって今回の中国赴任は貴重な経験であり、明らかに物事を見る視点が変化したと感じている。

これからの人生を豊かにする可能性を大きく切り開いてくれたことに感謝したい。

今後、時間が取れるようになったら、まず近日完成間近と聞く港珠澳大橋（香港・珠海・マカオ）を見学し、中国維新に関する小説をもう一度読み返し、まだ実現出来ていない中国の景勝地や歴史遺産等を訪問したいと考えている。